

平成 20 年 9 月 6 日 (土)
13:30 ~ 14:50
富山県民会館 302 号室

第 1 回 1 限目

福祉で活躍するアジアの人々

講師 富山福祉短期大学
社会福祉学科 准教授

根津 敦 氏

1 . 私の履歴

私は去年の今ごろまで、カナダの大学でソーシャルワークを勉強していたが、実は福祉を勉強する以前は、亜細亜大学で国際関係学を学び、大学卒業後にマレーシアのマラヤ大学に留学した。夜間にマレー語を教える先生が、日中は盲学校で英語を教えながら子供たちの生活の世話をしていると知り、その盲学校を訪ねた。すると、方ごとながらマレー語を話す日本人



に興味を持ったある視覚障害の女の子が「私も日本に行きたい」と言う。旅好きの私は旅とは観光であり何か変わったものを見ることが最大の楽しみとっていたので、彼女の言葉に驚いた。同時に、それまでは目の見えない人には旅行に行きたいという気持ちはないだろうと勝手に思いこんでいた、自分の中の偏見を思い知らされた。

そのことをきっかけに、日本に戻ってから新潟の国際大学大学院で国際関係学の勉強をしながら、視覚障害者の理解をしたくて県立盲学校を訪ねて話を聞いたりしていた。大学院卒業後、再びマレーシアに留学することとなり、研究テーマの多民族国家の政治を調査しながら、知的障害者施設や盲人訓練施設を訪れた。そこでマレーシアの職員たちから「日本の福祉制度はどうなっているのか」「日本では障害者の人たちはどんな暮らしをしているのか」と聞かれたのだが、当然ながら私には答えることができなかった。そこで社会福祉について一から勉強しようと、帰国後に日本ルーテル神学大学（現ルーテル学院大学）の社会福祉学科に社会人編入し、卒業と同時に社会福祉士の資格を取り、城西国際大学で実習助手を 5 年半務めた後に、カナダでソーシャルワークを勉強することになったのである。

2 .(社会) 福祉とは何か？

福祉というと、日本の場合はどうしても介護という方向に行くが、実は介護よりももう少し広い活動になる。また、日本の福祉活動はソーシャルワークと重なる部分があるが、ソーシャルワークではない。それが、私がカナダに 2 年間留学して強く感じた点である。

では、どういうものが福祉かということ、皆さんがイメージされるであろう老人福祉（介護保険、宅老所・グループホーム等）、障害者福祉（障害者の人権、自立・社会参加、子供の発達障害、精神障害者の問題等）のほか、生活保護、災害弱者、人権（同和問題、人種差別、女性の人権等）、労働問題、平和主義の問題などもすべて福祉に携わる人間が取り組まなければならない課題である。福祉とは高齢者や障害者の介護だけではなく、もっと広いものであることがお分かりいただけるのではないだろうか。

では、ソーシャルワーカーとはどんな人か。私は、「ソーシャルワーカーとはソーシャルワークをする人である。ソーシャルワークとはソーシャルワーカーがするすべての行動である」と定義している。ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを持った人がすることはすべてソーシャルワークになる。さらに、「見えない価値を見だし、それを支援に生かす専門職」「常識を破る活動家」という定義もある。いわゆる常識がさまざまな差別や偏見を生んでいる場合もあり、それを突破する活動家が必要なのではないか。そのときに、ソーシャルワーカーが持っている援助技術とは、エンパワメント、勇気付ける力である。

ソーシャルワークは、日本語では「社会福祉援助技術」といわれている。例えば、1 対 1 の支援をするケースワーク、問題を抱えた人たちを集めて支援するグループワーク、地域に働きかけるコミュニティワーク（コミュニティ・オーガニゼーション）、社会保障制度などを運用して福祉を向上するソーシャル・アドミニストレーション、アドボカシー（権利擁護）、実際に社会運動に出ていくソーシャルアクションなどがある。つまりソーシャルワークとは、社会問題に実際に向き合う仕事である。

社会福祉・ソーシャルワークが目指すのは、社会正義の実現である。カナダのソーシャルワークのテキストの表紙には、社会の不正義や不正に対して戦うことを示すべく、ホームレスや児童貧困、賃金カット反対を訴える写真が載っている。ところが、残念ながら日本の社会福祉教育は社会福祉施設の職員養成になってしまっていて、自分で何かを作っていくということがない。また、介護偏重、資格優先、官製の地域福祉であり、どうしても上からの福祉、行政頼みになっている。欧米の場合には、何か気付いたことがあったら自分が動くが、日本の場合はまず行政に頼むという傾向がまだ強いように思う。

そうはいつでも給与をもらわないと生きていけないので、ソーシャルワーカーが行政で職を得ることも多い。アメリカでもコミュニティセンター（日本で言う社会福祉協議会）に勤める場合、国家の手先になってしまうのか、国民の味方として働くのかというジレンマがある。

3 . 社会問題へのアプローチとソーシャルワークの新しい展開

ソーシャルワーカーが具体的にどういうものに向かっていくかということ、差別や偏見、貧困、ホームレス、DV（ドメスティック・バイオレンス）虐待、ジェンダー、エイズ、薬物乱用、アルコール依存症、児童労働、障害者差別、高齢者介護、買春売春、南北問題と幅広いが、新自由主義的グローバル化という問題についてもカナダの社会福祉学科の学生たちは勉強する。規制緩和、民営化、自由化、市場原理や競争原理の導入を新自由主義と呼ぶ。日本で有名なのは小泉改革だが、小泉改革は規制緩和ではなく規範緩和になってしまい、モラルが非常に乱れてきた。クレーマーが出てきたのも、ある意味では自由化や競争原理が規制されずに導入されてしまったせいではないかと思っている。そういうことについて、欧米でも議論されている。

社会問題へのアプローチとしては、貧困などの社会現象だけではなく、その問題を生んでいる構造に対して働きかけなくてはならない。私がカナダで習ったのは、Structural Social Work、構造に対して働きかけるソーシャルワークということである。

その基本となっているのがパウロ・フレイレという人で、この人は、先生と生徒という形ではなく、お互いに学び合うのだと言っている。Pedagogyという言葉を使っているが、自分たちの問題について自分で気付くようにしようということである。介護保険制度についても、何条にどんなことが書いてあるということよりも、介護保険が生まれた背景は何か、それによって良くなった点と悪くなった点は何か、悪くなった点を直すためにはどうするかということ、先生と生徒と一緒に考えて考えることが必要だと思う。

もう 1 人は、日本の社会福祉教育ではあまり出てこないが、ソウル・アリンスキーである。この人は 20 世紀はじめにアメリカで労働運動を展開しながら、虐げられてきた人の権限を守るなど、会社をあえて敵役として戦う対決の手法を生み出した。彼の手法はアメリカの宣教師によってフィリピンにもたらせ、フィリピンのソーシャルワーカーはコミュニティワークの手法として学んでいる。しかし、常に対決ばかりでは 20 世紀末からの課題である市民との連帯はうまくいかず、カナダでは同時に Win-Win の手法も学ぶようになっている。

今、新しい動きとして、人権を根本にしたソーシャルワークの展開が始まっている。世界人権宣言や国際人権規約、子供権利条約、障害者権利条約など、国連で成立した人権規約を基にソーシャルワークをしようということである。今までは、日本であれば日本国憲法に規定されている人権を基にソーシャルワークをしてきたが、それでは日本国籍を持っていない人たちの人権を守ることができない。カナダもたくさんの難民を受け入れており、そういう人たちはもちろんカナダの国籍を持っていないので、カナダの憲法にある人権規約では守ることができない。そこで、世界の国々が集まって採択した国連の人権を基にソーシャルワークを展開しようということになったのである。

日本ではあまり大きく報道されていないが、3 年ほど前に国連人権委員会が国連人権理事会という非常に大きい組織になり、いろいろな人権問題について話し合っている。例えば、カナダの N G O 団体が精神障害者や元ホームレスの人たちを集めて人権侵害や困っていることを話し合う。その方たちの意見を集約して報告書をまとめて国連人権理事会に提出し、審議会でも N G O 団体が「カナダ政府は何もやっていないではないか」と突き付けると、カナダ政府はたじたじとなって具体的な問題について話し合うこととなる。本来ならばそういうこともソーシャルワーカーの仕事の一つなのであり、日本のソーシャルワーカーにも期待したい。

4 . 社会正義を実現するために戦う人々と団体

インドの女性たちの人権侵害問題や小さな工場で働く女性たちの劣悪な環境のことを書いた本『女たちのアジア』には、現場で活躍する人たちを総称して「ソーシャルワーカー」という言葉が何度も出てくる。世界では搾取が行われている労働の現場で、ソーシャルワーカーという名前を持った人たちがそういう問題に取り組んでいるのである。

実際に私がマレーシアで出会った人たちの話をご紹介したい。一つは、ジョホール州にある視覚障害児の学校である。【写真 1】この学校は寄宿制になっていて、子供たちが点字などを勉強している。視覚に障害があるというとは全く見えないと思いがちだが、ある部分だけは見えるという人も多い。



【写真 1】マレーシア・ジョホール州盲児童養護学校

また、ボルネオ島のサンダカンにある視覚障害者自立訓練施設では、かご作りの訓練をしていた。【写真 2】しかし、その人たちの家は町ではなくジャングルのあるところにあるので、せっかくかごを作っても、家に戻れば売るところがない。マッサージも習っていたが、町に行けば需要があるにしても、やはりジャングルでは必要ない。そこで農業も習う。等間隔に棒を置いて苗を植えていく方法や、肥料の与え方などを習っていた。ただ、かご作りは手の訓練になる。また、隣の家にもボートで行かなければならないジャングルでは人とのコミュニケーションができないが、かごを町へ売りに行くことで人とのかわりができ、お金のやり取りをして金銭管理を学ぶことが

できる。私がこの施設に学生を連れていったときには、視覚障害者の人たちが健常者である学生にかご作りを教えてくれた。ボランティアで手伝いたいと思っていた学生が、実は教えられるばかりだったのだが、そこで交流が生まれるし、視覚障害者が教える方の立場を経験できるということは、本人たちにとっ



【写真 2】マレーシア・サンダカン盲人訓練学校
でのエンパワメントになるのだと思う。

ボルネオ島には知的障害児の通園施設もある。知的障害児の養護学校があるほか、知的障害者の就労支援などを行っている。ここに連れていった学生は、「子供たちは確かに知的障害があるけれども、英語は話せるし、マレー語もできる、カダザン語もできる、中国語もできる。どちらが知的障害か分からない」と言っていた。障害があるからといって見下すということでもない。やはり対等であり、場合によっては知的障害者の方が上だということだろう。この学校からホテルに送ってくれた運転手は知的障害者の人だった。そして庭の掃除や草刈りもする。知的障害者の人たちというのは非常に熱心で、3日かけてやれば3日分の給料がもらえるところを半日で終わってしまうので、それをセーブするためにスタッフがついていくそうである。知的障害があっても、できることはたくさんある。

それから、マレーシアで知的障害者の支援事業を始めた日本人がいる。中澤健さんという方で、厚生労働省を退官後、ペナン島に地域作業所や訓練センターを作り、さらにボルネオでデイセンターを始めたのである。中澤さんのお父さんはボルネオで戦死されている。もちろん戦争のときは国のために行ったのかもしれないけれども、自分の思いとは別に人をあやめたかもしれない、何とかお父さんが亡くなった土地で福祉をやりたいということで始めたそう。先週、アフガニスタンで亡くなってしまった方がおられるが、ほかのところでもこういう方たちが非常に頑張っている。

そのほか、イスラム教、キリスト教、仏教、ヒンズー教を基にした取り組みも行われている。イスラム教では、基本的にイスラム教徒が作ったものでなければ食べず、ラマダーン（断食）などいろいろな規則があるので、それに基づいたものを提供する生協のようなものができている。また、イスラム教の世界では、同じイスラム教徒なら人種が違っていても関係ないという考え方があるので、人種の壁を横断した里子制度が非常に進んでいる。キリスト教の団体なども活動している。

5 . 日本の特殊性とは何か？

日本でソーシャルワークを展開する場合にはどうしたらいいか。宇宙ステーションのロボットアームについて、精密で素早く、決まった動きをする日本の工作機械と、遠隔操作で状況を探査しながら動くカナダのロボットアーム技術とは、設計思想が異なるという話がある。どちらがいいということではないが、日本の場合は、形がまず決まってからでないと動かず、変化に弱い。それに対してカナダの場合は、変化に強いが、精密な動きは難しい。

日本の特殊性についてもう一つ紹介したいのは、司馬遼太郎の「21 世紀の宗教観は日本の宗教観が必要だ」という言葉である。日本の場合、生まれたときには神社に行き、結婚するときにはクリスチャンになり、クリスマスもする。これは無宗教なのではなく、宗教に対して寛容なのだ、その寛容性が 21 世紀の世界には大切だということである。

6 . 富山が直面している福祉の現状

富山の福祉の現状としては、見えない問題がたくさんある。生活保護受給世帯数が全国最低なのは、単に生活保護を受給させないということではなく、持ち家率が高いことも関係しているが、生活保護を受給せずに野宿生活をしている人は富山に存在している。富山では不登校を経験した子供が 4 人に 1 人いると聞いたことがある。教育熱が高いだけに、逆にそれに乗れなかった子供たちが不登校やひきこもりになっているのではないだろうか。

今話題になっているが、インドネシア人の看護師や介護士が富山にも来る。そのことによって日本人看護師や介護士の給与が抑えられるなど、自分たちの側への影響でしか捉えていない。しかし、海外へ自国民を大量に労働者として出しているフィリピンでは、家庭不和・家庭崩壊・社会の不安定・専門職の人材不足など様々な問題が噴出している。送り出す側である相手国への配慮やその視点からの問題意識も必要だろう。

そのほか、墓石への落書き、遺骨・骨壺の盗難、タイヤの穴開けなどが起きている。マンホール盗難はまだ日本では起きていないが、今アメリカで起きているので、今後日本でも起きるかもしれない。周りにいろいろ意味での貧困があるのに、それを感じられないという貧困感の貧困も心配なところだ。

私たちは、ホームレス支援の炊き出しサークルを学生たちと一緒に立ち上げた。若い人たちが実際に体を動かして、炊き出しや見回りといった支援をしている。ホームレスの人たちの境遇について自業自得ではないか、流行の言葉で言えば自己責任であるという思いがあるかもしれないが、そこに至るまでにはいろいろな問題があり、現実には朝から何も食べていない人たちに私たちは出会う。そうであれば、やはり何か手を差し伸べることが必要ではないだろうか。

7 . 21 世紀の福祉のキーワード

福祉のこれからのキーワードは、ノーマライゼーションではなく、ダイバーシティ（多様性）だろう。カナダ、アメリカ、そしてノーマライゼーションが生まれたデンマークでも、この言葉は既に消えている。ノーマライゼーションとは、障害者に対して「これが普通の社会なのだよ、だからそれに合わせよう」というものだが、彼らが望んでいるのはそういうことではない。障害者にもいろいろできることがあり、それをそのまま受け入れてほしいのである。多数派である健常者による普通という基準で諮られたくないのである。

実は、カナダのアルコール依存症を抱えるホームレスのための施設では、断酒を強要するのではなく、逆にお酒を提供している。なぜかというと、マイナス 30 度まで冷え込むカナダでは、酔って外で寝ればそのまま凍死してしまう。さらに、アルコール依存症の人たちは糖尿病、腎臓病、認知症などいろいろな病気を持っている。この施設でお酒が飲めるのだから、外で寝ずにここで飲みなさい、健康管理も行われるここで暮らみなさい、その中で安定した暮らしをしましようという発想である。断酒という苦しい禁欲な人生を送るのではなく、様々なサポートを受けることができるならば、飲酒のコントロールをしながらより良い人生を歩めるのではないか。このハームリダクション・アプローチが、ぜひ日本でも取り組まれればと思う。